

# 金沢大学附属図書館蔵暁烏文庫本「伊勢物語首書抄」翻刻（五）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/35087">http://hdl.handle.net/2297/35087</a>

# 金沢大学附属図書館蔵暁烏文庫本

## 『伊勢物語首書抄』翻刻（五）

村戸弥生

はじめに

本文翻刻

本稿は延宝二（一六七四）年刊本『伊勢物語首書抄』下冊（第四九段から第一二五段）の第八七段から第一〇九段までの翻刻であり、「翻刻（二）」『市民大学院論文集』第3号、二〇〇八年三月刊（上冊第一段から第二〇段）、「翻刻（二二）」同第4号、二〇〇九年三月刊（上冊第二段から第四八段）（以上は二〇〇七年度、二〇〇八年度の金沢大学市民大学院テキスト文化学専攻日本文学研究ゼミの成果）、「翻刻（三三）」『金沢大学国語国文』第36号、二〇一一年三月刊（下冊第四九段から第六八段）、「翻刻（四）」『金沢大学国語国文』第37号、二〇一二年三月刊（下冊第六九段から第八六段）に引き続き続くものである。翻刻にあたってはこれまで同様、金沢大学附属図書館蔵暁烏文庫本を底本に用い、不明な箇所は同版の石川県立図書館李花亭文庫本により補う。【底本書誌】【凡例】は「翻刻（二）」の記述によられたい。

（第八七段）

八十七

昔男つゝの国、むばらのこほり、あし屋の里にしるよししていきてすみけり。むかしの歌に

新古今声のやのなだの塩やきいとまなみつけの小櫛（くし）もさゝずきにけり

と、よみける、その里をよみける。爰をなん芦屋のなだとはいひける。此男、なま宮づかへしければ、それをたよりにて、衛ふのすけどもあつまりきにけり。此男の、このかみも、あふのかみ成けり。その家の前の海の辺にあそびありきて、いざこの山のかみに、ありといふ布引の瀧見にのぼらんといひて、のぼりて見るに、其瀧物よりことなり。長さ廿丈ひろさ五丈ばかりなる、石のおもてにしらぎぬに岩をつゝ、めらんやうになん有ける。さる、滝のかみに、わらう

だの大ききとして、さし出たる石あり。その石のうへに、はしりか、  
る水は、せうかうじくりの大ききにてこほれおつ。そこなる人に、  
みな瀧の歌よます。かのゑふのかみまづよむ。

新古今 我世をばけふかあすかとまつかひの涙の瀧といづれたか  
けん

あるじつぎによむ。

ぬき乱る人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばき  
と、よめりければ、かたへの人わらうことにや有けん、此歌に  
め、やみにけり。帰りくる道遠くてうせにし宮内卿もちよしが、家  
の前くるに、日くれぬ。やどりのかたをみやればあまのいさり火、  
おほくみゆるに、かのあるじの男よむ。

新古今はる、夜の星か川辺の螢かも我住かたのあまのたく火か  
と、説で家に帰りきぬ。其夜みなみの風吹て、波いとたかし。つと  
めて其家のめのことも出て、うき海松の波によせられたるひろひ  
で、家のうちにもてきぬ。女がたより、そのみるを、たかつきにも  
りて、かしはをおほひて出したる、かしはにかけり。  
わたづ海のかざしにさすといはふも、君が為にはおしまざりけ  
り

ゐなか人の歌にては、あまれりやたらずや。

八十七 むばらの郡声やのさと 業平の知行也。

○むかしの歌に 我知行なれば、昔下し時よみたる歌也。

○声の屋のなだの…… 歌の心明也。つげのをぐしもさ、ずとは、  
いやしきなだの塩やくものなどいとまなくて、かみなどけづる事も  
なきよし也。

○なまみやづかへ 是業平みづから書るとみへたり。なましゐの  
宮づかへなり。時にはあはぬを言也。

○ゑふのすけども 左衛門督 兵衛佐 衛門督等を言也。弓箭を  
帯する官人也。

○此男のこのかみ 業平の兄行平も左衛門督成、明成べし。

○いざこの山のかみに有といふ布引の瀧見に…… 布引の瀧あしや  
の里の上にあればかくいふ也。

○物よりすぐれたり たとへん物なき瀧のていなり。

○わらうだ 円座也。円座の大ききしたる石のさし出たる也。

○せうかうじ ちいさきかうじ、くりなどの大ききに水玉のか、  
るなり。

○ゑふかみまづよむ 行平の歌よめる也。

○我世をば…… 在原氏の時にあはずして、郡に隙有て田舎わたら  
ひなどしてたのむかたなきを言也。けふかあすかとまつかひの、か  
ひは間也。下句は世上に用られぬなげきの涙と瀧といづれかたか、  
らんと也。

○あるじ 業平也。

○ぬきみだる人こそ…… 此瀧のふせい水精の玉をつらぬきて、ぬ  
きみだしたるやうにおつる也。

○まなくもちるかとは 少のあいだもなくちりて、我袖にかゝる  
は過分なりと也。袖のせばきは卑下の詞也。我ごときの袖にと言心  
也。

○かたへの人わらう事にや 是業平のみづから書るとみえたり。

○めで、やみにけり みなく此歌におよばはあらじとて、よま

ずして家に帰也。

○宮内卿もちよし 誰共系図になし。

○やどりの方をみれば 業平の帰とて芦屋の里のわがやどりのかたをみやる也。

○あるじの男 業平也。

○はる、夜の…… いさりびとはみれども目前の景氣をほめんとて、はる、よのほしか川べの螢かあまのたくひかとうたがひみる也。

○つとめて 明る朝也。うきみるは波にうがひてよりたるみる也。

○たかつき 高土器ほんなどのたぐひにて、さらのたかきもの也。業平の家の女中より出したる也。

○わたづみのかざしに…… わたづみは海の惣名にも海神の事にもいふ也。いはふはあひする也。海神かざしにしてひさうする藻なれ共、都のまれ人にをしまぬと也。折しも風に吹よせたるは君にまいらせよとの事なるぞと也。

○ゐ中人の歌にては…… 物語作者の詞也。よきやあしやいかゞと批判したる也。

1、「ゑふかみ」は「ゑふのかみ」とあるべき。

2、「うがひて」は「うかびて」とあるべき。

(第八八段)

八十八

昔、いとわかきにはあらぬ、これかれ友達共あつまりて月を見て、それが中にひとり

おほ方は月をもめでじこれぞ此つもれば人の老と成もの  
八十八 いと若にはあらぬ よき年比の友だち也。

○それが中 業平也。

○おほ方は…… 月をつよく貪着する心よりかくいへり。花にても紅葉にても又人の上にても着してはいかゞと也。月にも余着してうかれありき、我身をもかへりみず、無常をも観ぜずしてむなしく老となりてはいかゞと也。

(第八九段)

八十九

昔いやしからぬ男、我よりはまさりたる人を思ひかけて年へける人しれず我恋しなばあぢきなく何れの神になき名おほせん

八十九 いやしからぬ男 業平王孫なれば物語作者のことば也。

○我よりまさりたる人 やごとなき人を思ひかけし也。誰共なし。

○人しれず我恋しなば 人しれずわがしにたらば、何たる神のたゝりにて死たるぞと神になき名をおふせん、さてもくそなた故に恋しぬるをもしらいでとかこちたる心也。

1、「かこちたる」は「かこちたる」とあるべき。

(第九〇段)

九十

昔つれなき人をいかでと思ひわたりければ、哀とや思ひけん。さらばあす物ごしにてもといへりけるを、かぎりなく嬉しくまだうたがはし。さりければおもしろかりける桜につけて

桜花けふこそかくも匂ふらめあなたのみがたあすのよのこと  
といふ心ばへもあるべし。

九十 つれなき人 なびがたき人也。誰共なし。

○いかでと 何とぞしてと日比に思ふ也。

○桜花けふこそかくは…… あすあはんといへ共、頼がたし、花はけふこそかく盛に匂へ、あすはうつろふ事もあらんといふ也。

○といふ心ばへも有べし 心にちとたのめ共、頼がたきと思ふ心も有べしと上を尺する物語の地なり。

(第九一段)

九十一

昔月日のゆくをさへなげく男三月の晦日かたに

後撰おしめ共春のかぎりのけふの日の夕暮にさへ成にける哉

九十一 月日のゆくをさへ 此さへと言にふかき心有。人生は、

そうくにして月日の過るをも覚えざるに、物思ふ故にたしかに覚

る也。けふも其人にあはず、此月もあはぬと月日のゆくをなげぐ也。

○おしめども…… 只大かたに過る月日さへ有に、春の名残もけふ

一日なり。あまさへ夕暮にさへ成たるよと也。思人にあはずしてい

たづらに過る月日のをしきに、夕ぐれにさへ成にけるかなといへる

所尤切なり。

1、「なげく」は「なげく」とあるべき。

(第九二段)

九十二

昔忍しさに、きつ、かへれど、女にせうそこをだにえせでよめる

芦迎こぐたな、し小舟いくそ度行かへるらんしる人もなみ

九十二 せうそこをだに 物をもえいはでかへる也。

○芦べこぐ棚なし小舟 たな、し小舟、ちいさき舟也。大き成舟

をたな付と言也。小舟はあしのしげりへこぎ入てはみえず。其ごと

く我思ふ人のあたりへ行帰くすれ共、人のしらぬといふよし也。

(第九三段)

九十三

昔男身はいやしくて、いとになき人を思ひかけたりけり。すこしたのみぬべきさまにやありけん、ふして思ひおきて思ひ、おもひわびてよめる

あふなく思ひはすべしなぞへなく高きいやしきくるしかりけり

むかしもかゝる事は、世のことはりにやありけん。

九十三 身はいやしくて 業平卑下の詞也。

○いと二なき人 第一成人なれば二なくならびなきと也。

○すこしたのみぬべき 一向にきれもはなれぬやう也。

○あふなく思ひは…… あふなく、念比成心也。又誠になと言

心也。なぞへなく、平等の義也。念比に思ひはすべし。恋ちはたか

きいやしきも平等にくるしきと也。

○昔もかゝる事は世のことはりにやありけん 今の世にもかくのこ

とくあれば、昔もかくやと注したり。

(第九四段)

九十四

昔、男有けり。いかゞ有けん、其男すまず成にけり。後に男有け

れど、子ある中成ければこまかにこそあらねど、時々物いひをこ

せけり。女がたにゑかく人成ければ、かきにやれりけるを、今の男

の物すとて、ひとひふつか、をこせざりけり。かの男いとつらくを

のがきこゆることをば、今まで給はねば、ことはりと思へど、猶人

をば恨みつべき物になん有けるとて、ろうじてよみでやれりける、

時は秋になん有ける

秋の夜は春日わする、物なれや霞に霧やちへまさるらんと、なんよめりける。女返し

ちゞの秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそちれ

**九十四** すまづ成にけり 業平女を離別する也。

○子有中なれば 業平には子の有中なれば、後に男を持ても返じ有也。

○ゑかく人成ければ 業平ゑかきにやれる也。

○今の男の物すとて 女の返事也。今の男の内には有てしりてはいかゞとて、一日二日をそなはる也。

○をのがきこゆる事 業平の恨ていひやれる也。我いふ事をば用ぬと也。

○ろうじて あざけりていひやる也。

○秋のよは春日忘る、…… 秋のよをは今の男にたとへ、春をば我にたとへ言也。霞は春、霧は秋也。霞に霧やまさるらんとは、我よりも今の男をまさりて思ふと也。ちへは千重也。

○ちゞの秋ひとつの春に…… 秋をちゞ合ても一つの春に及ぶまじきと也。され共立かへりて思へば、男の心はいづれもあだ成物也。

花も紅葉もともにちるなれば、更に世中の事につけんずる事にてはなき也。され共そなたをばとふと也。

(第九五段)

**九十五**

昔二条の后に、つかうまつる男有けり。女のつかうまつるを常に、見かはして、よばひわたりけり。いかで物ごしにたいめんしておほ

つがなく思ひつめたる事、すこしはるかさんといひければ、女いと忍びて物ごしに逢にけり。物語なんどして男

ひこ星に恋はまさりぬ天河へだつるせきを今はやめてよ

此歌にめで、あひにけり。

**九十五** 女のつかうまつる 二条后に仕女也。

○思ひつめたる事 日比のつもる思ひ也。

○ひこ星に恋は増りぬ…… 七夕は年にまれなる契なれ共、其夜をたがへず逢也。我中は物ごしなれば、ひこ星にまさりて悲しき也。

(第九六段)

**九十六**

昔、男有けり。女をとかくいふ事、月日へにけり。岩木にしあらねば、心ぐるしとや、思ひけむ。やうく哀と思ひけり。其比みな月のもちばかり成ければ、女身に、かさひとつふたつ、出きにけり。女いひおこせたる。いまは何の心もなし。身にかさもひとつふたつ出たり。時もいとあつし。すこし秋風吹たちなん時かならずあはんといへりけり。秋まつ比ほひに爰かしこより、その人の許へいなんずなりとてくぜち出きにけり。さりければ此女のせうと、にはかにむかへにきたりたり。されば此女かえでの初紅葉をひろはせて、歌をよみて書つけてをこせたり。

秋かけていひしながらもあらなくに木のは降しくえにこそ有けれ

と、書をきて、かしこより、人をこせば、これをやれとていぬ。さてやがて後、つるにけふまでしらず。よくてやあらんあしくてやあらん、いにし所もしらず、かの男はあまのさかでをうちてなんのろ

ひをるなる。むくつけき事、人ののろひごとは、をふ物にやあらん、おはぬ物にやあらん。今こそは見めとぞいふなる。

**九十六** 岩木にし 非人木石、ひとばくせきにあらずと言古語也。

○六月のもちばかり 六月十五日の比也。

○身にかさも一つ二つ 炎天あつき時なれば、いひのべんために、かさのいできたると作病する也。

○その人のもとへいなんずなりとてくぜちいできにけり 業平のもとへゆかんずるなどくぜつ出来也。

○此女のせうと 女のおとゞひども、むかひをやる也。

○秋かけていひし…… 秋風た、ばあはんと、契たることのはも思はずに、いたづらに成也。木のはちりつる江は、あさく成物也。其ごとくえんもあさく成たると也。

○かしこより人をこせば…… 歌を書置て業平より人をこせば、是をやるべしといひていぬる也。

○やがて後けふまでしらず いひをこせたるを、けふまでしらず有しと也。

○よくてやあらんあしくてやあらん…… 女の行ゑをしらねばよきさまやらん、あしきさまやらん、何たる所にゐるやらん、行末をしらぬと也。

○あまのさがでをうちて 人をのろふ事也。古事有也。

○むくづけき事 おそろしき事也。

○人ののろひごとは…… 業平の我のろひごとをわれといふ也。女のもし帰あふ事やあらんと思ひて也。

(第九七段)

**九十七**

昔堀川のおほいまうちぎみと申す、いまそがりけり。四十の賀、九条の家にて、せられる日、中将なりけるおきな

に 古今 桜花ちりかひくもれおひらくのこんといふなる道まがふかに

**九十七** 堀川のおほいまうちぎみ 右大臣基経也。

○四十賀 よそちのがとよむべし。

○九条の家 右大臣の家。

○中将なりける翁 業平也。

○桜花ちりかひ…… ちりかいくもれば、かきくもりていづくもみえぬやうにあれ、老の来べき道をまよふやうにと也。かにと言、かの字、けふの御賀をもたせてよめり。

(第九八段)

**九十八**

昔おほきおほいまうちぎみと聞ゆるおはしけり。つかうまつる男、長月ばかりに、梅のつくり枝に、きじをつけて奉るとて

ける 古今 大政大臣歌言我たのむ君が為にと折花は時しもわかぬ物にぞ有

とよみて奉りたりければ、いとかしこくおかしがり給ひて、つかひにろくたまへりけり。

**九十八** おほきおほいまうちぎみ 大政大臣忠仁公の事也。

○つかうまつる男 業平なり。

○わがたのむ君がためにと…… 作えだをよめり。長月は梅の有べき時にあらず。されば時しもわかぬとよめり。忠仁公をいはふゆへ

に、花もときはの色成といふ心也。

○いとかしこくをかしがり給ひて 此歌をかんにて使に縁なと給へると也。

(第九九段)

九十九

昔右近の馬場のひをりの日、むかひにたてたりける車に、女のかほの下すだれより、ほのかにみえければ中将なりける男のよみてやりける

古今見ずもあらずみもせぬ人の恋しくはあやなくけふや詠くら

さん

返し

古今しるしらぬ何かあやなくわきていはん思ひのみこそしるべ

成けれ

のちはたれとしりにけり。

九十九

右近の馬場のひをりの日 昔五月六日右近の馬場にて、右近衛の馬にのる事也。舍人共裾をひきをりてきる故にひをりと言也。右近の馬場は一条より大宮の方にありしとかや。

○女のかほのしたすだれより 車の下簾のはづれより見えたるべし。女誰共なし。

○中将なりける男 業平也。

○みずもあらずみもせぬ…… わづかにみたるばかりなれ共、其人を忘がたければあやなくけふや詠くらさんと也。あやなくは、かひなく也。あまきなく也。

○しるしらぬなにか…… しるともしらず共いふべき事なし。恋路

はたゞ思ひのみこそしるべになれと也。

○のちたれとしりにけり 後にはそんじやうそれと知たる也。

(第一〇〇段)

百

昔、男後涼殿のはざまをわたりければあるやむごとなき人の御つばねより、わすれ草をしのぶ草とやいふとていださせ給へりければ、たまはりて

忘草生るのべとは見るらめどこはしのお成後も頼まん

後涼殿のはざま あはひ也。

○やむごとなき ほめたる詞也。無止事と書也。

○御つほね 誰共なし。

○忘草を忍ぶぐさとや…… 業平の心みんとてかくいへり。普通しあたりを忘ぬらん、されど忍ぶといつはりてこたへんといひかけたる也。

○忘草おふるのべとは…… そなたには忘たれ共忍ぶとやこたへん、こなたはいつも忍ひければ忘草にあらず、後の契りをもたのまんと也。

(第一〇一段)

百一

昔左兵衛督なりける、在原行平といふ有けり。その人の家に、よきさげ有と聞て、うへに有ける左中弁藤原のまさちかといふをなん、まらうとぞねにて、其日はあるじまうけしたりける。なざける人にて、かめに花をさせり。其花の中に、あやしき藤の花有けり。花のしなひ三尺六寸ばかりなん有ける。それを題にてよむ。よ



みはてがたにあるじの、はらからなるあるじし給ふと聞てきたりければ、とらへてよませける。もとより歌のことは知ざりければ、すまひけれど、しめて読せければかくなん

咲花のしたにかくる、人おほみありしにまさる藤のかけかも

など、かくしもよむといひければ、おほきおとゞの栄花のさかりに、みまそかりて、藤氏の、ことにさかゆるを思ひてよめるとなむいひける。みな人そしらずなりにけり。

百一 さひやうゑのかみ行平 業平の兄也。

○うへに有けるとは、其日の上旨也。

○まらうとさね 客人をいふ也。さねは器の字也。

○あるじまうけ もてなしをする也。ていしゆ也。

○あるじのはらから 行平のあるじし給ふと聞て、業平の来る也。

○歌の事はしらざりければ 是業平自記とみへたり。

○さく花のしたにかくる、… 咲花の下にかくる、とは、忠仁公のかけを頼て有人也。有しにまさるとはめづらしき故を言也。忠仁公の栄花の先祖にこえたる心也。

○などかくしも 其座の人々のとふ也。

○おほきおとゞは、忠仁公也。

○みまそかりて まし／＼て也。

○みな人そしらず 人／＼かんじたる也。

(第一〇二段)

百二

昔男有けり。歌はよまざりけれど、世中を思ひしりたりけり。あるてなる女のあまに成て、よのなかを思ひうんじて、京にもあらず、

はるかなる山里に住けり。もとしぞくなりければ、よみてやりけるそむくとて雲にはのらぬ物なれど世のうきことそよぞに成てふとなん、いひやりける。斎宮のみやなり。

1、「よぞ」は「よそ」とあるべき。

百二 女は斎宮也。

○世中を思ひ知 世のことはりを知人也。

○もとしぞく したしき人也。

○そむくとて… 世をそむくとても、雲風にのりてうき世をよそにする様にはなけれ共、はるかの山里に入てすまれば、げには世にまつはれて住やうには有べからずとなり。

○となん… 地也。

(第一〇三段)

百三

昔、男有けり。いとまめに、しぢようにてあだなる心なかりけり。深草のみかどになん、つかうまつりける。こゝろあやまりや、したりけん、みこたちの使給ひける人をあひいへりけり。さて

古今ねぬるよの夢をはかなみまどろめばいやはかなにも成まさる哉

と、なんよみてやりける。さる歌のきたなげさよ。

1、「しぢよう」は「じぢよう」とあるべき。

百三 いとまめにじぢやうに まめもじぢやうも同し事を重ていへり。実要と書、実成人と言事也。

○深草のみかど 仁明帝也。

○心あやまりや 前に実要といへば、かくいへり。

○みこたち 何のみこ共なし。

○ねぬる夜の……一度そと人にあひみし夢の忘がたきほとに、誠の夢にもみゆらんかとまどろめは、はかなき事のいよ／＼まさると也。いやは、いよ／＼也。

○さる歌のきたなげさよ 花やかにもなき歌と也。業平の詞成べし。

(第一〇四段)

百四

昔ことなる事なくて、あまになれる人有けり。かたちを、やつしたれど、物やゆかしかりけん、かものまつり見に出たりけるを、おとこ歌よみてやる

世をうみのあまとし人を見るからにめぐはせよとも頼る、哉  
これは斎宮の物見給ひける車にかく聞えたりければ見さしてかへり給ひけりとなむ。

百四 ことなる事なくて…… 尼に成は何ぞしさい有らんに、是はしさいもなくて尼に成也。

○物やゆかしかりけん かたちをやつしなどしては物事に心をうつさぬを、物をゆかしがりたるをいさめて書也。

○世をうみの…… 尼を海人によせていへり。みるからもあま人によそへり。めぐはせ、めは海人のかる物なればいへり。世をうしとて尼に成人ならばめぐはせして、心をあはせよとも。めぐはせは目と目を合てがてんする也。さやうにたのむと也。

○これは斎宮の…… はづかしく思召て帰給ふ也。

(第一〇五段)

百五

昔、男かくてはしぬべしといひやりたりければ女

白露はけなばけな、んきえずとて玉にぬくへき人もあらじをといへりければいとなめしと思ひけれど、心ざしはいやまさりけり。

1、「人」の濁点は「ぬくへき」の「へ」にあるべき。

百五 女 誰共なし。

○白露はけなばけな、ん…… 白露はきえばきえんとま、よと也。

露は玉のやうにみごとなれ共、其玉をつらぬく人もあらじ也。

○いとなめしと 無礼と書。業平の心に及なきを思かけですてぬはびんなけれ共、志はいやましに成と也。

(第一〇六段)

百六

昔、男みこたちの、せうえうし給ふ所にまうで、立田川の辺にて

古今ちはやふる神代も聞ず立田川から紅に水くらるとは

百六 みこたち 何共なし。せうえうは、遊山観水也。

○まうで、は 参りて也。

○ちはやふる…… 立田川に紅葉のちりしきて、川のおもてもみえぬばかりなれば、水はたゞくれなるをくゞるやうにみゆると也。神の代にはふしきも有しとなれど、かゝるめづらしき事をば、いまだきかずと也。

(第一〇七段)

百七

昔あてなる男有けり。其男のもと成ける人を内記に有ける藤原のとしゆきといふ人よばひけり。されどまだわかければ文もおさ／＼

しからず詞もいひしらず。いはんや、歌はよまざりければ、かのあ  
るしなる人あんを書てか、せてやりけり。めでまどひにけり。さて  
男のよめる

古今つれづれのながめにまさる泪川袖のみひちて逢よしもなし  
返し、れいの男、女にかはりて

古今浅みこそ袖はひつらめ涙川身さへなると聞ばたのまん  
と、いへりければ、男いたうめで、今までまきて、ふばこに  
入てありとなん、いふなる。男文をこせたり。えて後の、事なりけ  
り。雨の降ぬべきになん見わづらひ侍る。身、さいはひあらば、こ  
の雨はふらじといへりければ、れいの男、女にかはりて読でやらす  
古今かずくに思ひ思はずとひがたみ身をしる雨は降ぞ勝れる  
と、よみでやれりければ、みのもかさもとあへで、しととにぬれ  
て、まどひきにけり。

**百七** あてなる男 勝也。すぐれたる也。業平也。

○其男のもとなりける人 業平のいもうと也。

○文もおさくしからず 女のいまだ若て文にも長ぜぬ也。おさ  
は長の字也。

○あるじ成人あんを書て 業平の文の詞をかきてをしえらる、也。

○めでまどひにけり としゆき此文をみて心に、思ふ也。

○つれづれの詠に…… つれづれのながめとは、しつかに心のうつ  
る方もなく、女の事のみ絶まなく思ふと也。

○返しれいの男 業平。

○浅みこそ袖は…… あさみなればこそ袖のみひちてといへれ、し  
づみながる、などあらばせてたのまん也。

○まきてふばこに入て 文を秘蔵したる也。

○又文をこせたりえて後の事なりけり 是は敏行と夫婦になりて  
の後に、文をやりたる時の事也といふ儀也。

○雨のふりぬべきにみわづらひ侍る…… とし行女の方へいひやる  
ことば也。それへとゆかんと思へば、雨のふりそふ成、わがみにさ  
いはひのあらば、此雨はふらじ、雨にふりこめれば、行がたきよし  
をいひやる也。

○れいの男…… 又業平のいもうとにかはりて返歌せらる、也。

○かずくに思ひ思はず…… 誠に思ひもせよと思はずとあれか  
し、そなたの心は見えたり、雨のふりさうなるほどにとひがたきと  
有は、われをとひがたく成といへれば、そなたの身をしる雨はふり  
まさるぞと也。

○と読でやれりければ…… 此歌をみてとりあへずぬれてきたる也。

○しと、は、ひたりとぬる、也。

1、「れ」は「られ」とあるべき。

2、「や」字一部欠損。

(第一〇八段)

**百八**

むかし、女ひとのこ、ろをうらみて

風吹ばとばに波こそ岩なれや我衣手のかはく時なき

とつねのことくさに、いひけるをき、をひける男

よるごとにかはづのあまた鳴田には水こそまされ雨はふらねど

**百八** 人のうらみて 業平の心を女恨也。

○風ふけばとばに…… 風のふけばとばに波のこす岩のごとく、風

のふかぬまもなく、波のたゝぬ折もなく、つねに風波にぬる、我袖成と也。

○とつねのことぐさに……業平の女のつねのことにいひしを、身の上にひきかけてきくなり。

○よひごとに……よひごとには、よひの間ごとにはあらず、よごとにと言心也。よなくにかはづが雨をこひて鳴也。しきりて鳴時は雨はふらねど、田に水のまさることく也。蛙のよりて水のまさるやうにこなたの思ひより、そなたの袖には波がこすと也。そなたの思ひばかりにてはなしと也。

(第一〇九段)

百九

昔、男女だちの人をうしなへるが許にやりける

古今花よりも人こそあだに成にけれ何れをさきに恋んとかみし

百九 友だちの人をうしなへるがもとに 業平の友、女にをくれたる成べし。

○花よりも人こそ……花も人もあだなる物なれど、猶其人ははかなくうせたるを、あはれみていへる也。花をさきにこひん共、人先にこひん共見ざりしに、思ひの外なる事成と也。